



集團とは

辻 正三

何か

わたくしたちは、集團とかグループとかいうことばを、日常の用語として気軽に使っている。それらの使い方からひき出される、「集團」ということばの意味はなんであろうか。ふつうの辞書に書かれているように、「多くの人びとの集まり」「集まってむれをなすこと」にはちがいないが、これではあまりに漠然としている。もう少し限定したり、種類を分けて考える必要がありそうである。

一、群集としての集團

「多くの人びとが集まってむれをなす」状態として、もっともわたくしたちの眼につきやすいのは、火事場にかけてたやじ馬、お寺の境内の盆踊り大会にくり出した老若男女、街頭の選挙演説に足とめて聞いている人たち、といったいわゆる「群集」である。

集團心理学、社会心理学の歴史からみても、群集心理の特異性

は、すではやく前世紀の終りごろに問題とされ、群集のなかの人びとの行動や感情は、孤立して単独の生活を続ける個人とちがって、一人ひとりの独自性が失なわれてある程度一様化し、暗示にかかりやすく、とくに衝動的、非合理的、無批判的な傾向、知的・道德的な低劣化を示しやすきことなどが注意された。

上にあげた例からもわかるように、群集とは、「偶然一時的に肩をならべていっしょに行動する人びとの集まりで、たがいに名前も知らず、ほとんど全く組織的なまとまりをもっていないが、しかも漠然とした一体感をいだいている状態」である。なお、群集を、積極的に行爲する乱集と積極的に行爲せず受動的な立場で形成される会集とに分けることもある。このような群集に類する現象は、小規模な形では、幼児にもみられる。ちんどんやのあとをぞろぞろついて歩く子どもたちの行列、お友だち同士のけんかをとりまいてさわぎ立てる幼児たち、街角の紙芝居に見いる十数人の子どものむれなどは、その例であろう。

このように、群集現象は比較的眼につきやすく、一時的に大きな

行動エネルギーを発散し、時には暴動や革命のような社会変動のきっかけになったりすることもあるが、多くは一過性の影響や効果を、群集のなかの人びとやその周囲に対してもたらすにすぎない。群集のなかでの人とひととの接触は、案外に皮相的、末梢的であるともいえる。

二、集団の心理学的な意味

これに対して、いつもいっしょに同じ行動をしているわけではない、外見上はそれほどはっきりした「人びとの集まり」ではないが、おたがいの間の直接間接の結びつき、かわり合いが、もっと持続する場合がたぐさんある。家族の人たち、職場の仲間、気の合う仲間よしグループ、学級、近隣地域社会の人びと、同じ会社、官庁に勤務する人たち、同じ国家に所属する国民など——結びつき、かわり合いの規模と程度を異にする大きささままの人びとの集まりが存在する。心理学や社会心理学では、このように相互の間になんらかの持続的な結びつき、かわり合いのある人びとの集まりを、とくに群集と区別して集団とよぶことが多い。

ホモ・サピエンスという動物的種に属するわたくしたちの一人ひとりとは、見かけの上では独立した一個の生活体の体裁を具えているが、生まれてから死ぬまで、社会というあみの目の人とひととの直接間接の結びつき、かわり合いの影響をまぬがれることができない。しかもこのあみの目は、時代とともにますます拡大され、また

複雑になってきており、その個人に及ぼす影響を具体的にとらえることは容易でない。このような社会と個人との関係を、ときほぐして理解する一つの手がかりとして、「集団」という概念が重要になってくるのである。

A 幼稚園に入園し、一年保育のB組に編入されたC野太郎ちゃんは、A幼稚園という組織的集団の園児であるとともに、その下位集団であるB組の一員となったわけであるが、その以前から引きつづき、お父さん、お母さん、妹の花子ちゃん、太郎ちゃんの五人からなるC野家の家族の一員でもある。またC野家は、D市E町××番地に所在し、付近一帯の地域社会に結びついている。太郎ちゃんのおうちでの遊び相手は、妹の花子ちゃんのほかお隣の次郎ちゃんやお向いの雪ちゃんである。彼らは、よくいっしょにおままごとなどをして遊んでいる。太郎君は、幼稚園では三郎君や新吾君と仲よくなって、自由遊びの時間には、目下のところ三人で砂場遊びにむちゅうである。時にはもつとほかの仲間に入って、鬼ごっこやかくれんぼをしていることもある。——といったようなわけで、C野太郎という幼児の生活は、四六時中なんらかの集団に所属し、また集団的事態で営まれているのである。これは、幼児に限ったことではない。ほとんどすべての人間は、いくつつかの集団に所属し、そのときときにそれらの一つまたはそれ以上に直接間接に枠づけられて、行動しているのである。

三、集団の種類

これらの集団は、いろいろな観点からいくつかの型ないし種類に分類される。集団のなかにふくまれる人びとの数の多少からは、大集団と小集団が区別されるが、何人までを小集団とよぶというようないかなる基準があるわけではない。小集団は、だいたい、集団をつくっている人びとが、それぞれ相手をよく知っており、直接相互に働きかけ反応しあう機会が多い集団である。この意味からは、「対面集団」とよばれるものも多い。

これに対して、おたがいに働きかけ合うというより、特定の共通な刺激に対して、同じような仕方で一様に反応している集団は、「共行動集団」とよばれる。クラスの全幼児の一人ひとりが、教室の中央にすわった先生を写生している場合などが、それにあたる。

また、家族、遊び仲間、近隣などのような、人びとがたえず直接に接触し、緊密な結びつきと協力を示している比較的少数の人びとからなる集団を、「一次的集団」とよび、これに対して、国家、官庁、会社、学校のような多数の人びとをふくみ、多少とも制度化され、その接触が間接的、部分的な集団は、一次的集団から派生したものととして、「二次的集団」とよばれることがある。

このほか、交友関係のような人びと相互の好ききらいや親疎の感情関係にもとづいて形成された集団（インフォーマル・グループ）と職場での部課組織のような公的形式な規制にもとづいた関係に

よって形成された集団（フォーマル・グループ）との区別も、よく用いられる。職場などでは、しばしば、フォーマルな集団組織とは別に、インフォーマルな結びつきができあがっており、これが職場のふんいきや能率を左右する場合が少なくない。

このように、集団にはいろいろな型ないし種類が区別され、それぞれ多少ともちがった影響や効果の人びとに与えると考えられるがこれらに共通した集団の基本的な特性というべきものは、集団をつくっている人びととの間の結びつき、かかわり合い——「相互作用」ないし「相互依存性」であり、相互作用や依存性の程度に、間接的、部分的、表面的なものから、直接的、全面的、緊密なものまで、種々の段階があるわけである。

四、集団の働き

わたくしたちの生活にとって、とくに重要な意味のあるのは、集団のなかの人びととの間に、密接な相互依存の関係がある集団である。この点、幼児の成長や生活にとっては、当然まず家族集団のあり方が問題になる。

家族集団にも、他の集団と同様、その凝集力に相違がありうる。凝集力とは、集団内の人びとがその集団に魅力を感じ、また積極的にその集団にとどまろうとする力の総体である。心身ともに未成熟な幼児自身としては、自発的にどうすることもできない以上、父母をはじめとするその他の家族成員の態度、行動が重要になってく

る。凝集力の弱い家族は、集団としての機能を失ない、けつきよく崩壊してしまふ危険がある。

また、家族のように長期間持続する集団には、自然に個人における個性にも似た特定の集団としての「ふんいき」が、かもし出され、また考え方や振舞い方の標準的な型あるいは規範ができ、集団のひととの行動をそれに同調させる力が働く。かつて家風とか家憲とかいわれたものに通じるものである。形成期にある幼児は、当然知らず知らずのうちに、その影響をつよくうけるはずである。

集団としての家族のふんいきや行動の規範が、社会一般の基準から逸脱した好ましくないものであれば、極端な場合には社会的不適応児や問題児をつくり出すおそれがあるわけである。集団が、集団内の人びとの共通の目標にむかって、一つのまとまりをもって活動するとき、個々の個人のばらばらな行動ではなしえないことを実現する。人間が、社会生活を営み、チームワーク、協同作業をやったり会議や討議をしたりするのも、まさにそのためである。家族も、社会生活の基本的構成単位として、いくつもの重要な集団目標を實現する機能をはたしてきた。近代社会の家族は、多くの機能を他の集団や制度に移譲したが、今なお、子ども——とくに乳幼児の成熟の助長と社会化の訓育、および社会人としての成人の人格の安定化という主要な機能を保持しているのである。このような機能を十分にはたすためには、前にふれた凝集力の大きい、なごやかな「ふん

いき」と健全な行動規範をもった家族集団であることが必要なことは、いうまでもないが、さらに家族の人びとが、それぞれしかるべき機能を分担し、地位と役割が適当に分化し、しかもおたがいの間に自由で平直な意思の交換（コミュニケーション）が行なわれる状態であることが望ましい。

以上、家族集団について、集団としての特性と機能のいろいろな側面をみてきたが、これらは、あらゆる集団にあてはめることができる。学級集団や職場集団、あるいはグループ・ディスカッションの能率ないし生産性にしても、集団訓練や集団心理療法の行動改善や態度変容の効果にしても、同様な諸条件によって左右されるのである。ここに、計画的な社会および個人の改善ないし治療のための知識・技術としてのグループ・ダイナミックス（集団力学）が登場してくる。

幼児の生活も、いつまでも家族集団のなかにとどまっていることはできない。近所の遊び仲間との接触からすんで、幼稚園への入園は、生活空間の飛躍的な拡大の第一段階である。そしてそれは、社会的な立場からすれば、組織的計画的な社会化の第一歩でもある。幼稚園における幼児集団の指導者ないし管理者である先生方は、集団の運営を幼児の健全な育成にとってより有効なものにするために、集団に関する知識と技術を活用していただきたいと思う。